

原著：30周年記念論文

熟練助産師の分娩介助におけるReflectionの探究

Reflection of the care for childbirth made by expert midwives

紙 尾 千 晶 (Chiaki KAMIO) *¹

島 田 啓 子 (Keiko SHIMADA) *²

抄 録

目 的

熟練助産師が分娩介助の経験を積みながら、どのようなreflectionをしているのかを明らかにする。

対象と方法

解釈学的現象学を理論的背景として14名の熟練助産師に対して、参加観察及び面接調査を行った。

結 果

助産師のreflectionは、分娩介助しているプロセスの中で行われるreflectionと、介助の終了後に行われるreflectionに大別された。

そして介助のプロセスの中で行われるreflectionは、予測外の展開や不確かな状況を気がかりとして感知するかどうかによって違いがみられた。まず、気がかりを感知した状況では、助産師は過去の経験知から様々な手段を携えて試行していく【様態1：試行を生み出すreflection】を行っていた。一方、正常に経過、進行していく想定内の状況においては、気がかりを感知せず、自身の経験知や身体感覚を復元させて瞬間的に介助行為に取り入れる【様態2：状況との融合を生み出すreflection】を行っていた。そして介助行為の後には【様態3：鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】を行っていた。

【試行を生み出すreflection】は2つのテーマ、〈成功する確信がない中で反応を探りながら試行する〉〈過去の経験で身に着けた豊富な手段を引き出す〉に整理された。

【状況との融合を生み出すreflection】は2つのテーマ、〈身体感覚を復元させて状況の意味を瞬時に見抜く〉〈正常性を見通して自然な行動を導く〉に整理された。

【鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】は5つのテーマ、〈気がかりが引っかかり心を揺さぶられながら取り組みを見直す〉〈その人にとっての出産の意味付けを共に考える〉〈経験した学びをパターン付けして塗り替える〉〈助産師として関わる自分の姿勢を見つめ直す〉〈他者との関わりの中で自分の経験知を磨き究める〉に整理された。

結 論

熟練助産師のreflectionは3つの様態、【試行を生み出すreflection】【状況との融合を生み出すreflection】【鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】に大別できた。

キーワード：reflection, 熟練, 助産師, 分娩

*¹ 金沢大学医学部附属病院 (Division of Nursing Kanazawa University Hospital)

*² 金沢大学大学院医薬保健学研究域保健学系 (Graduate School of Medical Pharmaceutical and Health Sciences, Kanazawa University)

2015年2月7日受付 2015年7月6日採用

Abstract

Purpose

This study aims to clarify the reflections made by expert midwives during their care for childbirth.

Methods

14 expert midwives were observed during their practice and interviewed. Interpretative phenomenological analysis of the interview was made.

Results

The reflection made by midwives were classified into two categories, a reflection made during and after their care for childbirth.

Whether the midwife was aware of unpredictable or uncertain situations as a concern was the difference seen in the reflection made during the care for childbirth. When a midwife was aware of concerning situation, [State 1: reflection that creates trials] was made where midwives reflect on their past experiences and took various trials to prepare themselves for the event that they assumed to follow. On the other hand, when childbirth was progressing normally and as predicted, [State 2: reflection that fuse with the situation] was made where midwives were not aware of any concerns and instantaneously restored their empirical knowledge and their somatic sensation into their care. After their care, [State 3: reflection by mirroring and seeing themselves objectively] was being made.

The [reflection that creates trials] was sorted out into 2 themes, <making trials while uncertain of its success> and <drawing out means from ones' rich past experience>.

The [reflection that fused with the situation] was sorted out into 2 themes, <recognize the situation instantly through restoring their somatic sensation> and <leading natural action foreseeing the normality of the process>.

The [reflection by mirroring and seeing themselves objectively] was sorted into 5 themes, <reconsidering their action due to their awareness of concern>, <sharing the process parturient can find the significance of their own childbirth>, <patterning and rewriting the learning from their experience>, <reconsidering the attitude as a midwife> and <polishing the empirical knowledge thoroughly by involving with others>.

Conclusion

The reflection made by midwives were classified into three states, [reflection that creates trial] [reflection that fused with the situation] [reflection by mirroring and seeing themselves objectively].

Keywords: reflection, expert, midwife, childbirth

1. はじめに

近年少子化や産婦人科医師不足といった時代背景において、安全で満足した妊娠出産環境を求める社会のニーズは高まっており、それに対応できる助産師の実践能力の向上が一層求められている(石引, 2013, pp.60-71; 渡邊, 2006, pp.100-101)。中でも分娩の開始から母児が対面できるまでの経過は、助産師が産婦のダイナミックな変化を捉え、的確に判断し実践できることが要求されている。

出産時、不確かな分娩経過を診ながら、母児の二つの生命の安全を図るためには、助産師は専門的技能と判断力を習得できる必要があり、経験的学習と、行動しつつ考えることが重要である(Benner, Hooper-Kyriakidis, & Stannard, 1999/2005, pp.2-34)。つまり、知的理解にとどまらず、実践しながら経験する状況を改めて学びの場として捉えなおし、学びを深めていく必要性がある(本田, 2003, pp.1-15)。さらに、経験とは単に時間の経過や回数をさすのではなく、経験の重ね方

の質が重要である(正岡・丸山, 2011, pp.158-168)。

経験の重ね方については、近年reflectionの重要性が見出されている(Schön, 1983/2005)。Reflectionは、一般に振り返り、反省などと邦訳され、自分自身を振り返ることは、経験を意味づけ吟味することであり、経験知を獲得していく上で必須の営みである(本田, 2001, pp.53-59)。Benner & Tanner (1987, pp.23-31)に拠れば、reflectionを十分に経た後に膨大な経験を持った熟練看護師は、各々の状況を直観的に把握できる。つまり、直観力を持つ熟練者となるためにreflectionは重要な概念であるといえる。

従って、助産師が経験を学びとして積み重ね、卓越した直観力を身につけるためには、reflectionは価値ある思考活動であるが熟練した助産師がどのようなreflectionを行っているのかの報告は少ない。そこで今回、専門職実践に焦点をおいたreflectionに言及しているSchön (1983/2005)の考え方が、専門職である助産師の実践中の思考を探究したい本研究に適していると考え、Schönの考えを一部参考に熟練助産師の

reflectionを探究した。

II. 研究目的

本研究は、熟練助産師が分娩介助の経験を積みながら、どのようなreflectionをしているのかを明らかにする。

III. 研究の意義

熟練助産師がどのようなreflectionを行い、経験を積んでいるのかを記述して説明できる。その知見を新人、中堅者に提供し、また卓越した直観力や統合力をもつ高度専門医療職へのキャリアアップ支援に寄与できる。

IV. 用語の定義

Schön (1983/2005) の考え方を参考に以下のように独自に定義した。

Reflection：助産師が経験で培われた知識と思考をめぐらせて分娩状況の本質を見極める思考活動。また自らの行動を導いていく過程及びその経験を振り返りながら、学びを深めていく営み

熟練助産師：勤務助産師で、分娩経過において卓越した能力を持っている人。日頃から母児や家族との信頼関係を築き、その交流を通して支援するケアが出来る優れた助産師であると管理者およびチームメンバーが推薦できる助産師（以下、助産師とする）

V. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究の理論的背景

本研究では理論的前提として解釈学的現象学の視点から着手した。reflectionは、経験で培われた知識と思考をめぐらせてその場の状況の意味を探り、解決法をデザインしていくプロセスであり、即興的で瞬時に生じては消えていく束の間に探究する思考、判断である。つまり、研究参加者がどのように状況の意味を探り対処しているのか、その時の状況に即して生じている事象の意味を探究する意義があることを前提にして

いる。また、reflectionは行為者が一つ一つの経験を、他者や状況との相互作用の中で、自分自身の学びとして深め、経験知を獲得していく営みである。よって、一人一人の助産師にとって、その経験が職業的専門能力の発達上どんな経験となったのか、またreflectionすることでどのように学びが深まっているのかに立ち返ることが必要となる。これらが、経験世界や経験の意味を理解することを目的とした解釈学的現象学に適していると考え、理論的前提に捉えた。

3. 研究参加者

研究参加者は北陸地域で産科を有する6施設に勤務し、施設長からの推薦があった熟練助産師14名

4. データ収集期間

2007年3月から8月にかけて12名の参加者のデータ収集を行い、逐次に分析と整理を重ねながら、データを追加することでこれまでの結果を肯定的に支持し、記述した内容の精緻を出すため2011年7月から10月に2名の参加者を同じ方法で追加した。

5. データ収集と手順

データ収集は参加観察と面接を行った。データ収集の過程は、批判的な反省を行い研究者の立脚点を明確にしながら行った。

1) 参加観察は、分娩第1期から第4期の中で研究参加者が関わった場面で、産婦や家族へのケアやその状況、また他の助産師や他職種との関わりを観察した。これらの情報は速やかにメモ帳に記入し、観察後時間経過にそってフィールドノートに詳細に記入した。なお、直接の助産業務には介入せず、研究者の存在がその場の流れを壊すことがないように立ち振る舞いに留意した。

2) 面接は、インタビューガイドをもとに研究参加者にとって今回の経験が持つ意味を自由に語れるように問いかけた。基本的には一連の業務が終了した直後に行ったが、業務の状況や情報提供者の疲労度に合わせかつ忘却の可能性を考慮し、48時間以内に行えるように配慮した。面接内容は、許可を得て録音し、逐語録にした。面接において、今回は、あくまでも自然体でreflectionしたことをデータ収集できるように留意し、振り返りを促す質問を控えて、思考全体を尋ねる問い方をした。また、語られた内容が、促された語りでないかを吟味しながら面接を進めた。

6. データ分析

自らの経験を分析させず自然と生み出されてくるものを引き出す解釈学的現象学のアプローチ方法をとっている Anita, Tore, & Anna-Karine (2002, pp.192-199), Catherine (2004, pp.41-49) らの方法を参考に、以下の手順で分析した。

(1) テキストを丁寧に読み込み、語られたデータに浸り、助産師の使命として大事にしている特徴を捉えられるように語りの意味を捉え、表現されたことの解釈を行う。

(2) reflectionの趣旨・研究目的に沿わず、重要でないものを取り除く。

(3) テキストの中からreflectionの目的に近いものや、専門的实践に特徴的な行為や思考を重要なフレーズとして抜き出し、仮のラベルをつける。

(4) ラベルの抽象度を合わせながら、類似したラベルを統合したり、さらに細分化して整理する。

(5) ラベルの中から参加者毎にわかったテーマを記述する。

(6) すべての参加者の語りを反芻して文脈を読み、類似性と差異性を整理して説明及び記述を行う。

(7) 記述したものを推敲しreflectionの本質に近い特徴を記述できるように修正、洗練を繰り返す。

7. 倫理的配慮

参加者が所属する施設長の許可を得て、助産師及び産婦、家族に文書にて研究の趣旨を説明し、承諾と同意署名を得た。研究参加は自由意志とし、研究協力を拒否できること、一旦承諾しても途中での辞退が可能であること、またその場合にも何も不利益になることはないことを伝えた。また、得られた情報は研究以外には使用せず、録音テープおよび逐語録・観察記録は分析後の発表が終わった時点で安全に消去・破棄した。結果を公表する場合も承諾のもとに個人情報とプライバシーの尊重を厳守した。分娩は産婦やその家族にとって母児の生命が危機に直面する状況である。そして極めてプライベートな情報を扱う場であることを認識すると同時に、面接が研究参加者に負担をかけることがないように配慮した。

なお、本研究は金沢大学医学系研究科等医の倫理委員会の承認を受け実施した。(承認番号：保65)

8. 真実性の確保

真実性の確保のために、研究参加者と信頼関係を築

く努力と平静に語れる時間の確保に努めた。また、プレテストを5例行い、観察の視点及びインタビューガイドを、よりオープンな語りを引き出せるように一部修正し、それと共に解釈学的現象学的な臨み方がデータ収集・分析過程に適しているかを再検討した。研究の全過程において、質的研究経験者のスーパーバイズを受けた。参加者に分析した内容をフィードバックして、言葉の違和感や語られた内容の解釈についての確認を一人につき1～2回行った。

VI. 結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者の概要を表1に示す。研究参加者は熟練助産師の定義に当てはまる14名の助産師であった。この14名は、参加観察と面接において、ケア内容や判断に熟練助産師としての技能が表れていることを確認した。

2. 熟練助産師のreflectionの様態

哲学的な観点から助産師がreflectionする時のさまを様態として記述した。以下に【 】でreflectionの様態を述べ、その内容をテーマとして「」で、全体像を図1で示した。本文ではテーマごとに整理したものを、状況を具体的に記述した。研究参加者の語りは“ ”で斜体で示し、状況や語りの意味がわかりづらい表現は()で研究者が説明を加筆した。

助産師のreflectionは、分娩介助しているプロセスの中で行われるreflectionと、介助の終了後に行われるreflectionに大別された。

そして介助のプロセスの中で行われるreflectionは、予測外の展開や不確かな状況を気がかりとして感知するかどうかにによって違いがみられた。まず、気がかりを感知した状況では、助産師は過去の経験知から様々な手段を携えて試行していく【様態1：試行を生み出すreflection】を行っていた。一方、正常に経過、進行していく想定内の状況においては、気がかりを感知せず、自身の経験知や身体感覚を復元させて瞬間的に介助行為に取り入れる【様態2：状況との融合を生み出すreflection】を行っていた。そして介助行為の後には【様態3：鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】を行っていた。

表1 参加者の背景と観察した状況

参加者	臨床経験 年数(年)	年齢	分娩経験 概数(例)	所属施設	出産経験 の有無	参加観察した状況の特徴
A	6	20代後半	400	個人病院	無	初産婦の分娩が急速に進行している状況
B	7	20代後半	60	大学病院	無	ハイリスク産婦の分娩が順調に進行している状況
C	7	20代後半	200	個人病院	無	初産婦と経産婦の分娩が同時進行している状況
D	7	20代後半	400	個人病院	無	初産婦の分娩が急速に進行している状況
E	9	30代前半	100	大学病院	有	子宮内発育遅延である経産婦の分娩が順調に進行している状況
F	11	30代前半	70	大学病院	無	初産婦の分娩が順調に経過している状況
G	11	30代前半	900	個人病院	有	初産婦と経産婦の分娩が同時進行している状況
H	14	30代後半	100	個人病院	有	前回急激に進行した経産婦の分娩が順調に進行している状況
I	14	30代後半	150	大学病院	有	妊娠中から継続して関わりのある経産婦の分娩が順調に進行している状況
J	14	30代後半	600	個人病院	有	4人の分娩が同時進行している状況
K	18	30代後半	180	個人病院	無	初産婦の分娩が順調に進行している状況
L	20	40代前半	180	大学病院	有	緊急入院した初産婦の分娩が急速に進行している状況
M	27	50代前半	2000	個人病院	有	初産婦の分娩が急速に進行している状況
N	27	50代前半	2500	個人病院	有	経産婦の誘発分娩に関わる状況

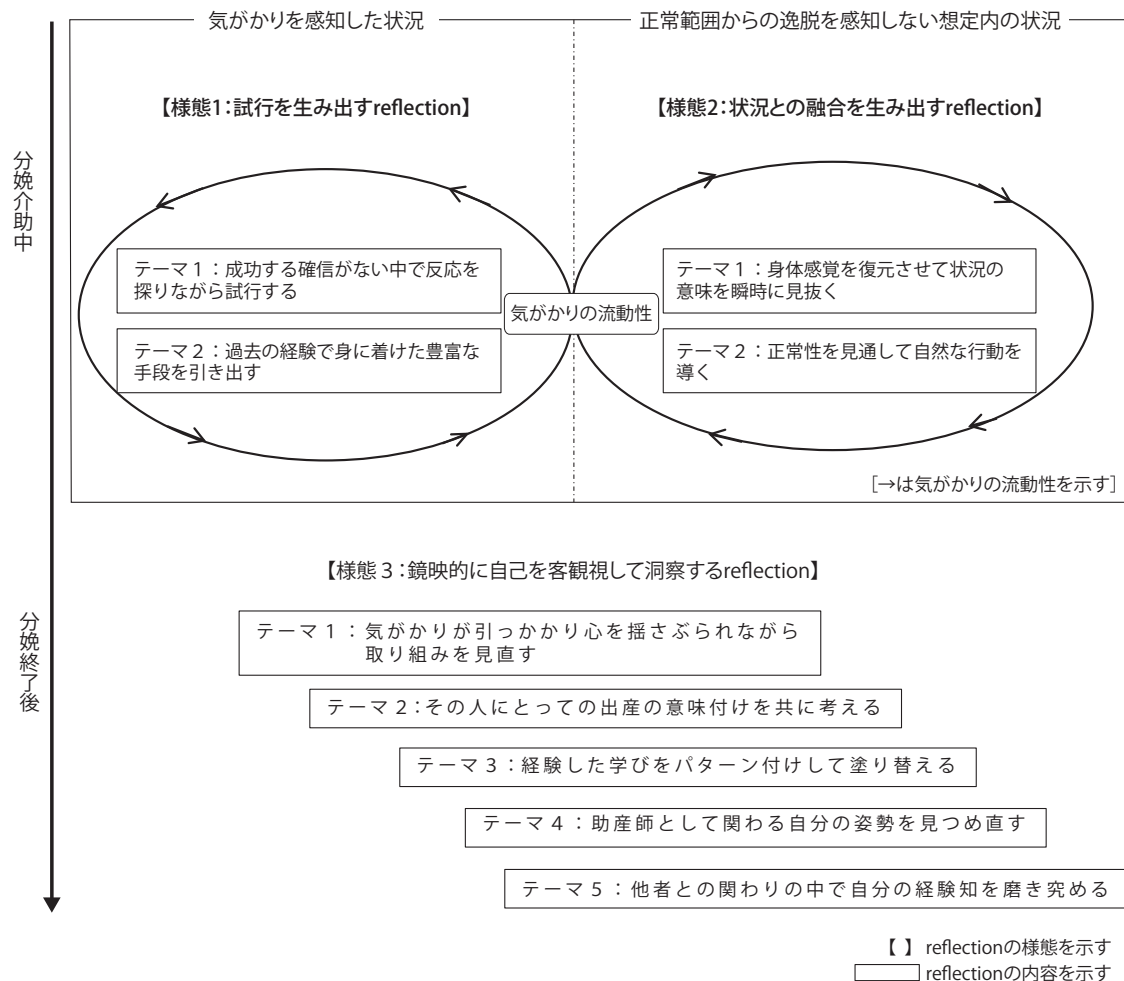


図1 分娩介助におけるreflectionの様態とその内容

様態1【試行を生み出す reflection】

これは、予測外の展開や不確かな状況を気がかりとして感知した助産師が、過去の経験で身につけた様々な手段を携えて、試行していく時のreflectionであった。助産師は、2つのテーマ、「テーマ1：気がかりを感知して、成功する確信がない中で反応を探りながら試行する」、「テーマ2：過去の経験で身につけた豊富な手段を引き出す」でreflectionを行っていた。テーマ1「成功する確信がない中で反応を探りながら試行する」

助産師は、想定外の状況に直面しなんらかの気がかりを感知し、その気がかりをきっかけに、理由を模索したり方針に迷っていた。そして、どうすることが望ましい結果を導くのかについての確信がない中で、産婦の反応を伺ったり、状況に探りを入れながら試行していた。

〈テーマ1の状況：なんで進まないんだろう。ちょっと座ってみる？〉

J 助産師は、初産婦aさんが子宮口9cmまで開大しながらもその後の分娩進行が遅延しているという気がかりをきっかけに、遅延の理由を探ったり、ケアの方向性に迷っていた。そして、過去の類似した経験を思い起こしながら産婦の反応を探り試行していた。

“回旋異常なのか、赤ちゃんが屈位をとれてないだけなのか。単に疲労で陣痛が弱くなってきて間延びしてきただけなのか、どうなんだろう。ちょっと四つんばいの体勢にするとか、赤ちゃんが回りやすくするように、しようかなどうしようかなと(思っていた)。もうちょっと歩くとかしてもよかったのかな。本当は足浴とかも思いついてはいたんだけど。はじめはこの人起きれるかなって思って。前の人も起きようねって言ったらすっごい嫌な顔されたなあ、とか思いながら、ちょっと座ってみる？って聞いたらずえつてくれてよかったなって。”

テーマ2「過去の経験で身につけた豊富な手段を引き出す」

助産師は、気がかりを感知した状況で、過去の経験で身につけてきた、状況に挑む様々な手段を引き出していた。

〈テーマ2の状況：なんとなくうまくいってない。雰囲気を変えようと進むことがある〉

G 助産師は、初産婦bさんの分娩が子宮口8cmの段階から進行が緩やかになった場面で、よどんだ空気を

感じ取り、体勢を変えてみる、トイレに誘導する、照明を落とす、付き添っている人を休ませる、扉を閉める、などといった、産む人が分娩に集中できる環境を作るための計画を次から次へと提示し導いていた。

“bさんのことは、やっぱり途中どうしようかなっていっぱい悩んだね。…試行錯誤みたいな感じでしたね。…根拠は全然ないんですけど、空気ってあると思うんです。進まない時のなんかこうよどんだような空気っていうか、なんかお産が停滞して、なんとなくうまくいってないかなみたいな、そういう雰囲気がする時って、その雰囲気を変えてあげたらいいかなと思うんです。例えばトイレに歩いてだけで、たまたま歩いたことでお産がすすむ人もいれば、力の入れ方がそこでわかったりとか、トイレでいきんで破水したりしてなんかちょっと状況変わるって時あるじゃないですか。あの、うん、なんかちょっと環境をかえてあげると違う気がする。環境によって産む人が自分のお産に集中できるかどうかっていうのはあると思うんです。”

様態2【状況との融合を生み出す reflection】

これは、助産師が正常範囲の女性の生理的変化に身を投じて状況と融合していく時のreflectionであった。助産師は、予測通りの分娩進行や想定内の変化の状況では、2つのテーマ、「テーマ1：身体感覚を復元させて状況の意味を瞬時に見抜く」「テーマ2：正常性を見通して自然な行動を導く」というreflectionを行っていた。

テーマ1「身体感覚を復元させて状況の意味を瞬時に見抜く」

助産師は、過去に経験したことを過ぎ去った出来事としてではなく、今現在自らの体に宿る感覚として潜在させていた。その潜在している身体感覚は、最近の類似した状況や場面、産婦の反応において復元されていた。そして、助産師は復元された身体感覚を活かして、目の前の状況の意味を瞬時に見抜いていた。

〈テーマ1の状況①：この顔は分娩室やね〉

J 助産師は、経産婦cさんが廊下で顔をしかめて立ち止まっている様子を見て、“この顔は分娩室やね”と、一瞬にして分娩の進行を見抜き、分娩台へ案内していた。

“これまでに、そんなすぐ生まれんわーって思ってたのに、すぐ生まれてしまった人のことが脳裏をよぎると、顔とかおなかの張りとかみると、ああもう(すぐ生まれる)かなって思う。”

〈テーマ1の状況②：内診した時に過去の失敗経験と似てる感じがした〉

C助産師は初産婦dさんの分娩において、指先の感覚で過去に類似した感覚を経験していることを感じ、方針を描いていた。

“前にまだ(児頭が)高い位置で、もう分娩体位とっていきまさせてたら、本人がもう疲れ切っちゃって、最後の押しが弱くて、結局クリステレルしたとかがあったから、…その人の顔を思い浮かべてって感じではないけども、(今回)診察した時に少ーし似てるような感じ、所見がね。だからこの人はゆっくり進めていこう、全開からも1,2時間はしっかり(児頭が)下がってくるのを確認してからって思った。やっぱり見直ししてるからか、そういう似たような人に会った時に、“あっ一回経験してるな”っていうのを感じて思い出すっていうか、“これ一回経験してる”って感じになる。一つとして同じお産はないんだけどね。その人を見た時に、今までの経験の中から、なんかその人に似たタイプが勝手に思い浮かぶんだ。 “あっこの経験した”とか、“こういう感覚前あった”, “そういえば”って感じで思い出していくかな。”

〈テーマ1の状況③：動物的勘。全体のオーラで夜中にくると思った〉

N助産師は、予定日超過のために誘発剤を内服しても陣痛が発来していない経産婦eさんの担当であった。eさんを見て“顔が産みモードに入ったね”と出産に向けて心身の準備を整えていることを一瞬で感じとり“夜中にあの人来るよ”と、他の助産師に話していた。

“動物的勘っていったら笑われるかもしれないけど、数字じゃでない手の感覚、っていうか顔の表情とかさあ、いろんな、全体のオーラみたいなものでさあ、なんとなーくさあ、たぶん夜中来るよねって思った。そういうのってやっぱりたくさん分娩の中で培ったのかもしれないね。あと、優先する時あるじゃない、この人が先、この人は後っていう、瞬時の判断みたいのが。そういうものも無駄じゃなかったんだろうね、ぎっとたくざんお産してた時は。動物的勘の血となり肉となったのかもしれない。”

テーマ2「正常性を見通して自然な行動を導く」

助産師は、予測通りの順調な分娩進行や想像通りの産婦の反応や変化といった想定内の状況において、そ

の正常性を見通して自然な行動を導いていた。

〈テーマ2の状況：スムーズな経過には自然と体が反応するって感じ〉

G助産師は夜勤帯に経産婦fさんを受け持った。fさんは分娩台に横たわり“もう無理！ひっぱって！（吸引分娩にして）”と大声で叫んでいたが、G助産師は“ひっぱらなくても産めるよー”と笑顔で明るく答え、てきぱきと分娩準備を進めて安全に児が娩出された。G助産師にとってこの経過は順調な経過であり、産婦が吸引分娩を切望しても特に深く心に留めたり熟慮することはなく、状況の正常性を見通して産婦をなだめながら対応し自然と体を反応させていた。

“fさんはね、お産速かったし、順調だったし、痛い！とか、ひっぱって！って言われても、“言っとられー（言ってもいいよー）”じゃないけど、大丈夫大丈夫って感じで順調に行ったかなって思うんだけど。スムーズな経過には本当に自然と体が反応するって感じかな。うまく進まないなって時はいっぱい考えるけどね。”

様態3【鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】

これは、自己を見つめ直し、自分にとっての経験として意味を捉え返して自分で経験したことを洞察し深めていくreflectionを示している。このreflectionは分娩終了後に何度も自然に沸き起こっており、時には数年の年月を経てから発生したりしていた。その内容は、5個のテーマで語られた。まず、自分の行為自体を見直すreflectionとして「テーマ1：気がかりが引っかかり心を揺さぶられながら取り組みを見直す」「テーマ2：その人にとっての出産の意味付けを共に考える」があった。次に、助産師としての自己を客観視し自分自身を見直すreflectionとして「テーマ3：経験した学びをパターン付けして塗り替える」「テーマ4：助産師として関わる自分の姿勢を見つめ直す」「テーマ5：他者との関わりの中で自分の経験知を磨き究める」といった内容で説明された。

テーマ1「気がかりが引っかかり心を揺さぶられながら取り組みを見直す」

助産師は、分娩中に満足できなかった状況や気に止まることがあり、分娩終了後に自分の取り組みを見直していた。その時には、分娩中から感じていた感情をひしめかせながら全身でreflectionを行っていた。

〈テーマ1の状況①：終わってからでも回旋のことばかり考えた。何かできることがあったのかな〉

J助産師は、4人の産婦のケアを同時進行しながら一人一人が安全に分娩を終えていたが、reflectionの中心は分娩進行が停滞していた初産婦aさんについてであり、分娩途中から“だれかaさんについてる？ついてほしい”“aさんの声聞こえなくなったけど大丈夫？弱くなってない？”と常にaさんのことを気にかけていた。介助を終えた後には満足できなかった状況を思い返し自分の行動や分娩進行遅延の原因を分析しながら関わり方を見直していた。

“(他の人の分娩で分娩室にいても)陣痛室からの(aさんの)いきみ声の方がすごく気になって。大きい声ができるたびに気持ちがそっちに行ってしまうていた。勤務を終えてからも、思っていたのはaさんのお産がどう進むのかなって。他の生まれた二人に関してはあんまり振り返りなく、ああ無事生まれてよかったな、重ならずによかったなくらいであんまり考えていません。…終わってからも回旋のことがばっかり考えとった。回旋異常やったら帝王切開になってるかもしれないし、もしそうあったら昼頃の時点で何かできることがあったのかなって思っていた。”

〈テーマ1の状況②：お産のことが頭を駆け巡って眠れない〉

H助産師は分娩終了後には“記録に書いたこと、申し送ったこととか、本当にそれでよかったかなって気になるし、自分の予測で(分娩時刻は)昼頃ですよって言ったのって、ほんとにその通りだったんだろうとか、ご主人は立ち会えたかなとか、上の子は立会いではできたかなとか…”と自分の行動の是非を振り返ったり、分娩の結末を気にしながらreflectionを行っていた。このようなreflectionは、H助産師が普段から行っているものであった。

“しょっちゅうよ、毎回。あの時もつこうすべぎやったんじゃないかなとか。お産から帰ってきててもすぐ寝れないし。お産の最初から最後までの流れが何度となく頭の中駆け巡るし……。”

テーマ2「その人にとっての出産の意味付けを共に考える」

助産師は、分娩終了後に、産婦の言葉や産婦の様子を通して自分の取り組みを振り返っていた。

〈状況9：たぶんお産はいい経験になったんだらうなって振り返りながら励ましてもらってる〉

N助産師は、産後の関わりを通して産婦の言葉、表

情、語調、育児している様子などから、分娩がその人にとってどのような意味を持ったのかを共に考えて助産師自身がエンパワーされていた。

“一緒に考えてみる。お産どうでした？というようなことを聞きながら…こちらがケアしたものに対しての評価がもらえるじゃないですか、表情とか、言葉の語調とか、そういう態度から、あの時はそれでよかったのねとか、もうちょっと何かしてあげられることあったかなとかって感じながら自分を評価してるかな。お産が終わった後でのびのびと育児していच्छれば、たぶん彼女にとってはお産はいい経験になったんだらうなっていう風にして、振り返りながら励ましてもらってる。”

テーマ3「学びをパターン付けして、塗り替える」

助産師は、経験から得た学びを自分なりのパターンに整理していた。そして、日々経験から学んだことをそのパターン付けに追加したり、修正したりして塗り替えていっていた。そのパターン付けは、助産師がreflectionの時に感じた感覚に基づいてあいまいに整理されていた。

〈テーマ3の状況：ぼわ～とした産婦さんは速いってのはあるんです〉

J助産師は、過去に経験したパターン付けを参考に行動していた。J助産師が同時に4人の分娩に関わる中で、産徴はあるが陣痛は発来していない初産婦gさんに関して、実は危機感をもって観察していたと語った。

“あんまり自覚なくクロツとしてて、ニコニコしてて、ぼわ～とした人やったから、ぼわ～とした人は速いってというのはあるんです。だからgさんは進んでたらどうしようってというのはあって、あの人のことは所々気にしながら見に行ってた。案の定、次に入院してきてすぐ生まれたし。”

テーマ4「助産師として関わる自分の姿勢を見つめ直す」

助産師は、分娩終了後に分娩のことを想起し、自身の取り組みをreflectionしながら、助産師として関わる自分の姿勢を見つめ直す機会をもっていた。

〈テーマ4の状況：自分がお産する機会に恵まれ、こう思うようになった〉

I助産師は、過去に家族の付き添いがない産婦を数分間一人にしてしまった経験について、自己の出産体験を機に数年の年月を経てreflectionし、助産師とし

ての自分の姿勢を見つめ直し、変化させていた。

“その時は、その事についてあんまり考えなかったけど、自分がお産する機会に恵まれて、覚えている情景の中に家族とかパパが存在していることが、退院した後には大事じゃなくなってしまうようになった。…結構、見ていることも覚えてるし。触ってるのもわかるから、感覚として覚えてるから、そういう所にパパがいるようにしてあげようと思うようになった。”

テーマ5「他者との関わりの中で自分の経験知を磨き究める」

助産師は、同僚や他職種など、他者との関わりの中で、相談したり悩みを話し合ったりして、自身の経験を深く洞察していた。他者との関わりは、他者から直接の解決策をもらうという受身でなく、関わりを通して自分自身との対話が深められた結果として経験知を磨き究めていた。

〈テーマ5の状況：じゃあXさん（同僚）はどうやってしてるのかな。Xさんのお産をちょっと覗き見て〉

H助産師は、毎回終了後に自己反省を続けているが、悩みが解決できない場合には、医師や助産師仲間に相談したり、尊敬する助産師の分娩を見学したりする中で、悩みの答えを見つけ出していた。

“どうがんばってもスムーズにお産させてあげれなかったと思った時に、じゃあXさん（同僚）は、どうやって呼吸法誘導してるのかなとか、例えば発露になってから、会陰が切れずに出てくるようにする手の使い方とかその時のXさんの姿勢はどうしてるのかなとか。Xさんは、顔をみて（産婦の方を見て）、手の感覚だけで呼吸法誘導してる。まだ会陰見ないと介助できませんかって聞かれた事あって。それ聞いた時に、目指すはそこだと思って。次からできるだけお母さんとは視線を落とさないようにしなきゃと思いながら、じゃあどうやったら顔だけみて呼吸法誘導できるかなって思って、Xさんのお産をちょっと覗き見てる。”

VII. 考 察

本研究では、熟練助産師が経験で培われた知識と思考をめぐらせて状況の意味を探り、解決の方法をデザインしていく過程と、経験から学びを獲得する過程について、文脈に即しかつ一人一人の経験に立ち返るといふ解釈学的現象学の視座から探究した。本研究で語られた内容を既存の知識と関連付けながら、熟練した

助産師のreflectionの特徴を考察し、最後に今後の熟練者へのキャリアアップ支援への示唆を述べる。

1. 気がかりがきっかけで生じる熟練者の試行

アメリカの教育者・哲学者である Shön (1983/2005) は、行為中に状況の意味を探り解決策を導き出す「reflection-in-action」と、状況から離れたところで行われる事後的な振り返りである「reflection-on-action」を中核として展開される理論を打ち出している。Shön (1983/2005, pp.76-128) によると「reflection-in-action」は、状況の中でなんらかの驚きや不確かさを感じた時にそれを解決すべく行われる探究とされているが、本研究においても気がかりがきっかけとなる【試行を生み出す reflection】がみられた。

熟練者の試行に関しては、谷津の研究 (2002, p.151) において「看護者の表現は看護者の内なるものを満たし得ぬ状況において冒険的に生み出される」と述べられているように、冒険的試みとして述べられている。さらに谷津 (2002, pp.167-171) は、冒険的に試みられた看護者の行為が対象者にまさにフィットしてしまうことの背景には、事態の本質を一气につかむ知的直観と、それが過去の経験の力に支えられて実現される可能性を示唆している。本研究ではG助産師が、分娩が進行しないよんだ空気を一瞬にして感じ取り、雰囲気を変えるために様々な手段を試行していた。これは谷津の示す冒険的試みとその背景にある知的直観に通じるものだと考える。

一方、J助産師は過去に同じように坐位を勧めて拒否された経験を想起し、成功する確信がない中、産婦の反応を探りながら試行していた。助産師は不確かな状況における試行が、事態を好転させるための糸口になる可能性と、逆にならない可能性も含んでいることを経験から学習しており、両方の可能性を想定した上で反応を探りながら状況を見極めていたと考える。では、状況や反応を探りながら試行を生み出していくという reflection は、熟練者の特徴といえるのだろうか。Benner (2001/2006, p.84) は熟練者の特徴として、「不経済な検討をせずに状況を直観的に把握し、問題領域に正確にねらいを定める」と解説しており、同様に Jasper (1994, pp.769-776) は「診断や解決方法をあれこれと無駄に考えることに時間を費やさずに問題領域に照準を合わせることができる」と述べている。つまり熟練者は効率よく確実に問題に焦点を絞る能力を持っていると考えられている。本研究における、状況や反応を探りながら一つ一つ試行を生み出していく関わり

方やケアの方法は、一見それらの特徴と相反するようにみえるが、本研究で助産師は過去の経験から身につけられた豊富な手段を携えて、その試行に対する産婦の反応を敏感に受け止めながら、不確かな状況に幾度となく挑んでいた。これは分娩が時として予測を超えて劇的な変化を遂げる可能性を秘めていることを心に留めつつ、正確にねらいを定めていく熟練した姿であり、既存の報告にはない熟練者のreflectionの特徴であると考えられる。

2. 瞬間的な過去の経験の呼び起こし

次に気がかりがきっかけとならないreflectionについて考察したい。反省的看護実践や技に関する報告でも、驚きや気になることを発端とするものが多く見受けられる中(本田, 2001, pp.53-59; 西田・江本・筒井他, 2007, pp.34-43), 本研究では、助産師が驚きや気がかりといったきっかけが存在しない状況においても、[状況との融合を生み出すreflection]をしていることが明らかにされた。既存の枠組みに含まれないこのreflectionの様態は、普段は意識的に言語化されず、他者から見れば熟練助産師個人のもつ世界観や雰囲気がいづかのまにか事態を丸く収めているように映るかもしれない。J助産師は、4人同時に進行する分娩に関わる中で、気がかりに思わない産婦については意識的には考察されていなかった。しかし、廊下で立ち止まる産婦を一目見た瞬間に、過去の視て触れた経験を取り込み“この痛みは分娩室やね”と分娩台に案内したり、陣痛未発来状況でも“ぼわ～とした人は速い”という過去のパターン付けに照らし合わせて予想外の分娩進行の可能性を察知しているように、普段は意識して表出しない束の間のreflectionを行っていた。このように、熟練助産師は、驚きや気がかりがない想定内の状況においても、瞬時に過去の経験を今に取り込みながら次の行動を導くというreflectionを行っていた。熟練助産師が判断の手がかりとして経験知を活かしていることを明らかにした渡邊・恵美須(2010, pp.53-64)が、刻々と変化する出産場面に即応するとは、産婦が感じていることを同時に感じ、その状況に助産師の身体がすぐに反応すると述べている。つまり劇的に変化する可能性が潜在する分娩経過の中で、自然に母体の変化に助産師自身の体を沿わせ、瞬時に感覚で過去を取り入れながら行動を導くreflectionは熟練助産師の特徴である。

3. 感覚の中で行う過去の経験の引き継ぎ

熟練助産師の経験知の取り込み方に焦点をあてると、本研究では熟練助産師が、類似状況において経験知と身体感覚を瞬時によみがえらせて状況の意味を見抜き、即座に行動を導いていたことを明らかにした。

Benner & Tanner (1987, pp.23-31) は、エキスパートナースの直観的判断のひとつに類似性の認知をあげている。ナースは類似性を認知することによって、過去の出来事と現在の状況とは現実には違っていたとしても、漠然としたファジーな類似性をそこに感じ取ることができる(野島, 2003, p.84)。本研究においても、熟練助産師は過去の類似経験を身体感覚を通して今の分娩介助に取り入れていたが、一方で、“似ていても一つとして同じ分娩はない”という認識は、様々な熟練助産師から語られていた。

ではひとつとして同じ分娩はない中で、なぜ熟練助産師が活用する過去の類似経験は今現在の介助にうまく取り込まれるのだろうか。Guyton-Simmons & Mattoon (1991, pp.21-27) は、エキスパートの知識はよく整理され、区分され専門化されていると述べている。さらに、エキスパートは過去に関わった患者の状況について、多くの経験の蓄積から抽象概念を作り上げており、意思決定する際にこうした抽象概念をひきだしてきていると述べられている(野島, 2003, p.87)。本研究においても、熟練助産師が過去の経験を自分なりにパターン付けして、それを引き出すという現象が現れていた。しかし、本研究においてはよく整理し区分し専門化された知識を用いるというよりは、論理的には説明できない助産師の身体感覚や直観的な察知に基づいてパターン付けされて、今現在の行動、判断に引き継いでおり、それらは明確に区分された知識としては存在せず、現在の熟練助産師の中に未だ残る感覚として潜在していた。

Benner (1994/2006, p.51) に拠ると、Heideggerは現在において生きている過去のことを既在性と呼び、過去とは文字通り過ぎ去ってしまい跡形もなく消えるのではなく、自分の所属する社会の伝統やこれまで歩んできた経歴などとして今現在を形作っていると共に、今現在において過去として意識されるものであると述べてられている。本研究の助産師が、過去の経験を自らの体を介して現在まで生きられている経験として潜在させている判断力、対応力は、この既在性に通じるものであると考えられる。助産師のもつ経験は、過ぎ去った過去となるのではなく、現在の自分を形作るひ

とつの要素として現在も生き続けており、類似経験に出会った時に、再び生々しく浮かび上がると推察される。

4. 熟練者へのキャリアアップ支援への示唆

キャリアアップ支援の視点からみると、振り返りを通しての学びの大きさや、自己成長のためにreflectionの重要性を指摘する報告がある (Asselin, Schwartz-Barcott, Osterman, 2013; 菱沼, 2010)。本研究の助産師が、熟練者として成熟している今現在においても、鏡映的に自己を客観視して洞察するreflectionを行い、行為自体を視る視点から助産師としての姿勢を見つめ直し、自分の経験知を磨き究める視点へと発展させながら、自らの持つ経験知と新しい経験からの学びを統合させていたことは、専門職として成長し続ける存在として、reflectionの重要性を示唆する結果であると考えられる。

さらに、原田 (2011, pp.69-78) は熟練看護師の省察によって導き出された経験知を表出し、具体的に記述して他者と共有することができればさらにキャリア形成や相互成長につながると指摘している。本研究では普段表出化されにくい、熟練助産師の束の間のreflectionを具体的に記述できたことに加え、瞬間的に過去の経験を呼び起こしたり、感覚の中で過去の経験を引き継ぐといった熟練助産師自身も意識していなかったreflectionの特徴を導き出したことは価値あることと考える。これらは、体験を共有したものの同士で共に語り合う場をもつことで言語化され表出化されて新人からの助産師育成に寄与すると考えられる。様々な成長段階の助産師が交流し合い、体験を共有していくことで熟練助産師の瞬時のreflectionが引き継がれていく可能性があると考えられる。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、研究参加人数が少なく、勤務助産師の一部であり、即一般化はできない。今後は熟練度によるreflectionの違いや、熟練者へと成熟する過程におけるreflectionの変容を明らかにすることが課題である。

VIII. 結 論

1. 熟練助産師のreflectionは3つの様態、【試行を生み出すreflection】【状況との融合を生み出すreflection】【鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】に

大別できた。

2. 【試行を生み出すreflection】は2つのテーマ、〈成功する確信がない中で反応を探りながら試行する〉〈過去の経験で身に着けた豊富な手段を引き出す〉に整理された。
3. 【状況との融合を生み出すreflection】は2つのテーマ、〈身体感覚を復元させて状況の意味を瞬時に見抜く〉〈正常性を見通して自然な行動を導く〉に整理された。
4. 【鏡映的に自己を客観視して洞察するreflection】は5つのテーマ、〈気がかりが引っかかり心を揺さぶられながら取り組みを見直す〉〈その人にとっての出産の意味付けを共に考える〉〈経験した学びをパターン付けして塗り替える〉〈助産師として関わる自分の姿勢を見つめ直す〉〈他者との関わりの中で自分の経験知を磨き究める〉に整理された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました母子の方々、助産師の皆様へ心より感謝致します。本研究は金沢大学大学院2007年度修士論文を一部加筆、修正したものである。

文 献

- Anita, L., Tore, N. & Anna-Karin, D. (2002). Both empowerment and powerless mothers' experiences of professional care when their newborn dies. *BIRTH*, 29(3), 192-199.
- Asselin, M.E, Schwartz-Barcott, D. & Osterman, P.A. (2013). Exploring Reflection as a process embedded in experienced nurses' practice: a qualitative study, *Journal of Advanced Nursing*, 69(4), 905-914.
- Benner, P. (2001) / 井部俊子監訳 (2006). ベナー看護論 新訳版 初心者から達人へ. p.84, 東京: 医学書院.
- Benner, P. (1994) / 相良ローゼマイヤーみはる監訳 (2006). 解釈的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理, p.51, 東京: 医歯薬出版株式会社.
- Benner, P., Hooper-Kyriakidis, P.L., & Stannard, D. (1999) / 井上智子監訳 (2005). ベナー 看護ケアの臨床知 行動しつつ考えること, pp.2-34, 東京: 医学書院.
- Benner, P. & Tanner, C. (1987). Clinical judgement How expert nurses use intuition. *American Journal of Nursing*, 87, 23-31.
- Catherine, M. (2004). Nurse-patient communication: an exploration of patients' experiences. *Journal of Clinical Nursing*, 13, 41-49.

- Guyton-Simmons, J., Mattoon, M. (1991). Analysis of strategies in the management of coronary patients' pain. *Dimensions of Critical Care Nursing*, 10(1), 21-27.
- 原田雅子 (2011). 熟練外来看護師のやりがい獲得の過程に潜在する実践知の可視化. *日本看護科学会誌*, 31(2), 69-78.
- 菱沼由梨 (2010). 臨床指導者の視座による分娩介助の「振り返り」という学びの意味. *母性衛生*, 50(4), 637-645.
- 本田多美枝 (2001). 看護における「リフレクション (Reflection)」に関する文献的考察. *Quality Nursing*, 7(10), 53-59.
- 本田多美枝 (2003). Schön理論に依拠した『反省的看護実践』の基礎的理論に関する研究—第一部 理論展開—. *日本看護学教育学会誌*, 13(2), 1-15.
- 石引かずみ (2013). 助産師の産科医師との協働に関する研究—助産師の専門職的自律性に焦点をあてて—. *日本助産学会誌*, 27(1), 60-71.
- Jasper, M. (1994). Expert, a discussion of the implications of the concepts as used in nursing. *Journal of Advanced Nursing*, 20, 769-776.
- 正岡経子, 丸山知子 (2011). 産婦ケアにおける助産師の『語り』から経験知を抽出するナラティブ分析. *日本保健医療行動科学会年報*, 26, 158-168.
- 西田志穂, 江本リナ, 筒井真優美, 飯村直子, 草柳浩子 (2007). 小児看護における技のモデル構築. *日本看護科学会誌*, 27(1), 34-43.
- 野島良子 (2003). エキスパートナース その力と魅力の構造. pp.84-87, 東京:へるす出版.
- Schön, D.A. (1983) / 佐藤学, 秋田喜代美訳 (2005). 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える. pp.76-128, 東京:ゆみる出版.
- 渡邊淳子 (2006). 熟練助産師が実践している分娩期ケアの特徴—分娩第1期の参加観察から—. *日本助産学会誌*, 19(3), 100-101.
- 渡邊淳子, 恵美須文枝 (2010). 熟練助産師の分娩期における判断の手がかり. *日本助産学会誌*, 24(1), 53-64.
- 谷津裕子 (2002). 看護のアートにおける表現—熟練助産師のケア実践に基づいて—. 151, 167-171, 東京:風間書房.